

大津 透 著

律令国家と隋唐文明

紹介者 三谷 芳幸



岩波書店

2020年2月刊

新書判

230ページ

本体 840円

目次

はじめに——鬼ノ城にて

第一章 遣隋使と天皇号

第二章 東アジアの緊張のなかでの権力集中

第三章 律令制の形成と「日本」

第四章 固有法としての律令法

第五章 官僚制と天皇

第六章 帰化人と知識・技術

第七章 吉備真備と「礼」

第八章 鑑真来日と唐風化の時代

おわりに

隋 唐文明の圧倒的な影響のなかで、7世紀から9世紀にかけて、日本の律令国家は形成され、展開していく。その過程を、壮大な視点と緻密な考察のもとに、明快に描きだしたのが本書である。

本書の議論の特色は、律令制の形成と展開を、律令の継受と「礼」の継受という、二段階の中国文明の受容としてとらえる点にあるだろう。前者は、大宝・養老律令の編纂に結実する法の継受であり、後者は、儀礼の整備をともなう儒教的な社会規範の継受である。

律令への関心は、遣隋使の帰国によって始まり、7世紀半ばからの東アジアの国際的緊張のなかで、唐・新羅に対抗できる集権国家の建設をめざして、律令の継受による国制の形成がおこなわれる。こうして大宝・養老律令にもとづく律令制ができあがるが、そこには隋唐の律令制にはみられない、日本固有の様々な特徴が含まれていた。法の継受による第一段階の律令制では、隋唐的な国制がそのまま実現されたわけではなかったのである。第四章のタイトルが、「継受法としての律令法」ではなく、「固有法としての律令法」となっている点に、本書におけるこの段階の位置づけが表れているだろう。

これに対して、中国の社会規範を取り入れることで、隋唐的な国制により近づこうとしたのが、8世紀半ばから9世紀にかけての、律令制の第二段階の継受である。その起点となったのは、「礼」を中心とした儒教に関わる文物を、入唐した吉備真備が持ち帰ったことだった。その後、鑑真による仏典・戒律の将来や、藤原仲麻呂による唐制の模倣もあって、中国文明は本格的に日本に浸透していき、国制の唐風化が大幅に進むのである。

これに対応して、天皇の性格も大きくかわる。天皇はもともと宗教的・神話的存在で、その周りには日本固有の古い習俗が多く残っていた。しかし、「礼」の継受によって、天皇の衣服や、天皇への拝礼作法、天皇による祭祀などが唐風化し、天皇のあり方は隋唐の皇帝のあり方に接近していく。著者は、このような天皇の変化を具体的に示し、律令制の展開のなかに位置づけている。

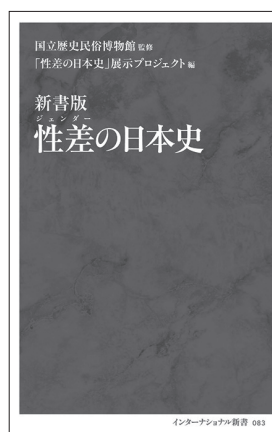
本書は、学問の危機に抗する歴史学の「知」として、読者のまえに提示されている（「あとがき」）。中国史だけでなく、朝鮮史・仏教史・美術史など、広く深い素養に支えられた巨大な「知」の結晶であり、高校時代に先生を通じて、このような「知」に触れることができれば、古代史に魅せられる若者が増えるのではなかろうか。

（みに・よしゆき／筑波大学人文社会系准教授）

国立歴史民俗博物館 監修
「性差の日本史」展示プロジェクト 編

新書版
ジェンダー
性差の日本史

紹介者 太田尾 智之



集英社インターナショナル

2021 年 10 月刊

新書判

224 ページ

本体 840 円

目次

『新書版 性差の日本史』刊行によせて
プロローグ 倭王卑弥呼
第一章 古代社会の男女
第二章 中世の政治と男女
第三章 中世の家と宗教
第四章 仕事とくらしのジェンダー——中世から近世へ
第五章 分離から排除へ
近世・近代の政治空間とジェンダーの変容
第六章 性の売買と社会
第七章 仕事とくらしのジェンダー——近代から現代へ
エピローグ ジェンダーを越えて——村木厚子さんに聞く
新書版 あとがき
国立歴史民俗博物館について

本誌2021年10月号(4号)の「歴史のひろば」コーナーで、国立歴史民俗博物館の企画展示「性差(ジェンダー)の日本史」が取り上げられた。企画展の開催当時、筆者も関心をもっていたのだが、忙しさにかまけて訪問しないままとなってしまった。本誌で横山百合子氏の展示紹介文を拝読し、見学の機会を逸したことを後悔したが、その矢先に本書が出版されたことは幸いであった。本書は「来館者やSNSでの反響が大きかった資料を中心に、ジェンダーの視点から日本の歴史を通観していただけるよう、分厚い図録を、手軽に持ち歩いて読める本」にしたもので、新書という限られた枠組みのなかで実に豊富な資料を収録している。

そもそも歴史教育の現場では多くの人物を取り扱うが、固有名詞をもつ女性が登場する場面はどれくらいあるだろうか。小学校で学ぶ歴史上の人物42名のうち、女性は3名(卑弥呼・紫式部・清少納言)と少ない。また、高校日本史で女性の名前が登場する機会も、男性のそれと比べて多いとはいえない。このような状況のなかで、男女という区分そのものに着目することは、「歴史総合」や「日本史探究」の授業実践につながるだろう。たとえば本書の冒頭では卑弥呼が取り上げられ、卑弥呼の巫女イメージが近代以降に強調されたものであることが指摘される。この話題1つを取ってみても、女性イメージがいかに形成されていくのか、探究的な学びの糸口を見出すことができる。ほかにも、古墳時代における女性首長の被葬者の例をはじめ、我々が無意識に抱いている先入観の存在に気づかされる事例が多い。

また、本書の「あとがき」でも触れられている通り、ジェンダーを語るための特別な歴史資料は存在しない。見慣れた資料でも「ジェンダーの光をあてることによって、初めて、それまでの常識とは異なる新しい歴史像」を生む。しばしば我々は多面的・多角的な歴史理解を求めようとするが、そのためには多様な問題関心にそって資料と向き合うことが必要なのではなかろうか。ジェンダーも、そのような問題関心の1つなのだろう。巻末には参考文献がコメント付きで紹介されており、さらに学ぼうとする読者に有益な構成となっている。今後の授業づくりの参考書として備えておきたい1冊である。

(おおた・ともゆき／東京都立国立高等学校教諭)